

(言語聴覚学科) 入学試験問題

小論文 (課題文)

(注 意)

- 一 係員の指示があるまで、問題用紙及び解答用紙に触れないで下さい。
- 二 問題は二頁〜五頁に印刷されています。
- 三 解答用紙に氏名、受験番号及び受験科目名を記入して下さい。
- 四 机の上には鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、時計(計算機能のついていないものに限る)、受験票以外は置かないで下さい。
- 五 受験票は番号札の手前に置いて下さい。
- 六 マスクを着用している者は、試験官が本人確認する間、マスクを外して下さい。
- 七 ハンカチ、ティッシュペーパーを使用する者は、静かに挙手をして、係員の指示に従って下さい。
- 八 試験中に気分が悪くなったり、トイレへ行きたくなった者は静かに挙手をして、係員の指示に従って下さい。
- 九 試験問題に関する質問は一切受け付けません。
- 十 途中で退室する者は、解答用紙を机の上に置き、静かに挙手をして、係員の指示に従って退出して下さい。ただし、試験開始後三〇分間及び試験終了一〇分前の退出は認められません。
- 十一 試験終了後、試験問題は持ち帰って結構です。

「課題文1」

今日、若者を中心にして多くの人々の心に*仮想的有能感が潜み始めていると言えるだろう。もちろん、個人差もあるが、ここでは仮想的有能感の形成に関わる社会・文化的要因について考えてみよう。

仮想的有能感の形成要因として、第一に新しい電子機器に対する適応の問題がある。若者は概して、携帯電話、コンピュータ、デジタルカメラ等を自由に操ることができる。最近の機器によって、人間一人の手作業ではできない複雑なことや、パワーを要することがいとも簡単にできる。それは自分の操作のうまさによるものでなく、機械の性能のよさに起因するのだが、それを多くの若者は自分の力であるかのように誤解するのである。とてども一人の能力や腕力でできないことを、機械は短時間に実に巧妙にやっつけてのけるようになった。それを簡単に操作できるごく普通の若者たちは、自分自身が有能になったように錯覚するのである。

第二はマスメディアの発達であろう。現在、われわれはテレビやインターネットを通して、瞬時にして世界の動きを知ることができる。これは有能さに関係なく誰もが体験していることであるが、昔、世界の様子を直に見ることができなかつた人たちに比べると、世界そのものが自分の手中にあるような錯覚に陥り、自分が有能であるように誤解するのである。そして、マスコミが伝えるものについては、自分が当事者ではないので、客観的に二次元高いところで、その出来事を見ているような気分になる。観察者や視聴者は誰もが解説者のような気分になり、上から見下ろしているような錯覚に陥る。原因帰属の研究で、行為者より観察者は、行為者の行動の原因を行為者自身の要因に帰しやすいため、という知見があるが、観察者になる機会が多いと、実は自分のことを見つめようとせず、代わりに直接知らない他者の表面的な欠点などが、大いに気になるようになる。

第三は個人主義が先鋭化することで人間関係が希薄化し、直接問題となっている相手の力量なり有能さなりを、相手と関わることで知ろうとしないためであろう。そのため、自分以外の人を多面的に見ることができなくなっており、特に他者の優れた部分については、あまり意識しないようになっているのではなかろうか。教育という観点から言えば、少子化が進み、個別学習に力点が置かれることで、多くの人と協力して学ぶとか何かを作成するといった機会は減少しつつある。それだけ他者のよい面を見出す機会が失われていると言えよう。

第四は人を軽く扱う風潮である。例えば、テレビのお笑い番組などが増えて、人々が笑う機会が増えているが、他者の欠点を笑いのめすようなことが、平然と行われている。

さらに、テレビも新聞も、報道の自由をいいことに、注目される人物を裸にしてしまう傾向がある。特定の人を徹着取材して、すべての生活をオープンにしてしまうようなところがある。かつては、まずい部分は隠蔽^{かくぺい}されて、いいところだけが強調され、大衆には伝えられることが多かった。このため「尊敬される人物」というものが、多く存在したのかもしれない。しかし、現代はマスコミが視聴者の受けを狙うために、あらゆる情報を包み隠さず、しかも特に悪いところをクローズアップして大衆に示そうとする。そのため、人は他者を一般に尊敬せず、見下げるようになるのではなからうか。これは第二に述べたことと重なる面を持つ。

第二から第四については、若者だけでなく、現代人すべてが仮想的有能感に陥りやすい要因と言えるかもしれないが、文化の変化の影響を最も受けやすいのはやはり若者たちであろう。

(速水敏彦「他人を見下す若者たち」より)

* 仮想的有能感……自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚。

〔 課題文 2 〕

どんな医療でも、人間を理解することなしには成り立ちません。人間の理解というと、精神医学や心理学のアプローチを思い浮かべるかもしれませんが、そうではありません。どんな医療でも、人間を理解することが基本中の基本であり、いちばん大事なことです。

現代の医療では、患者さん一人一人の人間理解は大切なことだといわれながら、なかなか医療の基本としてとらえられていません。しかし緩和ケアにおいては、まさに人間理解なしにはケアは進みません。では、緩和ケアにおける医療の場合、人間の理解はどのようなアプローチから始まるのでしょうか。

たとえば、こちらが患者さんのケアを一生懸命しようと思つて接近しても、患者さんが壁をつくつて、中に入れてくれないことがあります。こうした場合、私たちはたいへん困ります。

ある女性の患者さんの場合、完全にそういう壁をつくつた状態になっていました。そこで、その患者さんが、なぜ自らそういう壁をつくつた状態で閉じこもり、私たちとのコミュニケーションを拒否するのか、手がかりはないものかと思い、患者さんのお姉さんに来てもらい、生活歴を聞いてみました。

すると、次のような事情がわかりました。

まず、小さいときに両親が離婚していました。そして、家庭環境のなかで非常につらい目にあい、学校時代にはかなり大変ないじめにあつていました。

さらに経済的にも問題があり、進学を希望しながら、大学に進むことができませんでした。それで高校を卒業してすぐに就職しました。ところが今度は、その職場の上司からいわゆる「パワー・ハラメント」のような仕打ちを受け、退社に追い込まれたのだそうです。

その後、職を転々としているとき、寂しさからたまたま出会った男性と結婚しました。ところが、結婚相手はアルコール中毒、しかも浮気をされ、ついには離婚に至ります。また独りきりの生活に戻ってしまったのです。

この患者さんは、生きてきた道のりのすべてで人間不信につながる出来事に遭遇していたのです。患者さんにとって心を開いて人を受け入れることは、とんでもない目に遭う経験の連続につながることだったのです。

したがって、壁をつくるのが、患者さんの生き方そのものだったのです。患者さんが、なぜこんなにバリアをつくつてしまうのか、ようやくわかつてきました。

医療士たちのスタッフたちと、この件について話し合いました。

そのとき出てきた共通の感想は、「人は自分の責任範囲の外で起こったことまで引きずつて生き、引きずつて死んでいく」というものでした。

自分のせいではないことに振り回され、そのために他人を寄せつせず、コミュニケー

シヨンを拒絶する人がいるのです。

その人の現実を見つめることから、その人のケアはスタートします。

「親の離婚」「学校でのいじめ」「職場でのいやがらせ」「夫のアルコール中毒」などは、この患者さんの責任範囲の外で起こったことです。

しかし、自分の責任外で起こったことを背負いこみ、引きずりながら、亡くなりました。最後まで壁をつくったままでした。

この方のつくった壁をくずすことが良いことか悪いことか、私にはわかりませんでした。しかし、わからないからといって何もしなかったわけではありません。

こういった患者さんのなかには、一生懸命ケアを続けるうちに、壁の一部を開けてくれ、コミュニケーションがとれるようになることがあるのも事実です。ですから私たちは、あきらめずに努力を続けなければいけません。

また、壁をつくって外部の人間とのコミュニケーションを拒否する患者さんに対しては、「困った人」と思わないようにします。

「人は自分の責任範囲の外で起こったことを引きずって生き、引きずって死んでいく」
そういう考え方や理解の仕方を自分のなかに導入すれば、「どうしてこの人はこちらの働きかけに心を開かないのだろう」などと、腹を立てなくて済みます。

「この人はなぜ、こういう行動をとるのか？」

「この人のやりにくさは、どこから来るのか？」

そういう命題を冷静に立てて、一人一人の育ちや生きてきた環境の分析をします。

もちろん人には、生きてきた環境以外にその人の持ち味というものがありますから、「持ち味プラス環境でできあがった人間」を理解すれば、その人個人に対するケアの方向性が、おのずと決まってくるわけです。

そういう意味では、「人間理解」は医療人にとって、あるいは患者さんの関係者にとつて、不可欠なことです。

私たちのケアは、チームとして患者さんに対応します。ケアの方針は、それぞれの患者さんによって相当違ってきます。そこに至るまでの患者さんの事情が個人個人で違うのですから、違って当たり前なのです。

Aさんに良かった方法がそのままBさんにも良いかといえば、決してそうではありません。AさんにはAさんらしさがあり、BさんにはBさんらしさがあるからです。

個人の事情を理解して、患者さんの「らしさ」を尊重することが、ケアするうえで大切なポイントです。

(相木哲夫「いのちに寄り添う。」より)

